

憶良熊凝哀悼歌の特質

はじめに

山上憶良は、靈龜二年から養老四年の伯耆、そして神龜三年から天平四年の筑前という二度の国司時代を経験している。筑前も伯耆と同様の上国であるが、また七〇歳近い年齢からくる健康問題があるにせよ、九州にはそれなりに期待して下向したのであろう。これ迄幾多の厳しい人生の試練に耐えて来たのであるから、国の政事を行う長として理想と現実を弁えた人格を具えていたであらうし、筑前国守とは憶良を晴れがましくさせたであらう。そして、赴任後官吏として律儀な程誠実であつたらしい憶良は、勤勉に己の仕事にいそしんだらしい。

ところで、憶良は二度の国司赴任と帰任の旅を経験した

筈である。この旅中には何故か作品を残していないし、不思議に国守任期中望郷を主題とする歌も積極的にもない。かかる憶良でも在唐中に「いざ子ども」（一・六三）の望郷歌を作っていた。在唐の歌と言えば、万葉集の唯一のものである。

ところで、行路死人の歌は特殊なものでないにもかかわらず、路傍に息絶えた名もない一青年を悼み、天平三年に長短歌六首ものの代作を憶良が試みている。十八歳の青年の死を主題とする熊凝哀悼歌は、次の六首である。

敬みて熊凝の為に其の志を述べたる歌に和へたる
六首并せて序

筑前国守山上憶良
大伴君熊凝は、肥後国益城郡の人なり。年十八歳に

森

斌

して、天平三年六月十七日に、相摸使某国司官位姓名の従人と爲り、京都に参向ふ。天なるかも、幸くあらず、路に在りて疾を獲、即ち安芸国佐伯郡の高庭の駅家にして身故りき。臨終らむとする時に、長嘆息きて曰はく「伝へ聞く『仮合の身は滅び易く、泡沫の命は駐め難し』と。所以、千聖も已に去り、百賢も留らず。況むや凡愚の微しき者の、何ぞ能く逃れ避らむ。ただ、我が老いたる親並に庵室に在す。我を待ちて日を過さば、おのづからに心を傷むる恨あらむ。我を望みて時に違はば、必ず明を喪ふ泣を致さむ。哀しきかも我が父、痛しきかも我が母。一の身の死に向ふ途を患へず、唯し二の親の生に在す。苦しみを悲しむ。今日長に別れなば、いづれの世にか観ゆるを得む」といへり。乃ち歌六首を作りて死にぬ。その歌に曰はく、
うち日さす 宮へ上ると たらちしや 母が手離れ
常知らぬ 国の奥処を 百重山 越えて過ぎ行き 何
時しかも 京師を見むと 思ひつつ 語らひ居れど
己が身し 勞しければ 玉梓の 道の隈廻に 草手折り
柴取り敷きて 床じもの うち臥い伏して 思ひ
つつ 嘆き伏せらく 国に在らば 父とり見まし 家

に在らば 母とり見まし 世間は かくのみならし
犬じもの 道に臥してや 命過ぎなむ〔一は云はく、
わが世過ぎなむ〕（八八六）
たらちしの母が目見ずて鬱しく何方向きてか吾が別る
らむ（八八七）

常知らぬ道の長手をくれくれと如何にか行かむ糧は無
しに〔一は云はく、乾飯は無しに〕（八八八）

家に在りて母がとり見ば慰むる心はあらまし死なば死
ぬとも〔一は云はく、後は死ぬとも〕（八八九）

出でて行きし日を数へつつ今日今日と吾を待たすらむ
父母らはも〔一は云はく、母が悲しさ〕（八九〇）

一世には二遍見えぬ父母を置きてや長く吾が別れなむ
〔一は云はく、あひ別れなむ〕（八九一）

安芸国の高庭の駅家で死んだ熊凝青年を、憶良は漢文の序と挽歌六首で哀悼を表現した。巻五に収められた憶良の作品としては、比較的冷遇されてきたのであるが、転換期のものであるとして理解すべき内容もありそうである。そこでこの熊凝哀悼歌の特質を深り、特殊と思われるその作歌動機を究明したい。

一、古日の歌と白水郎歌

死者に対して哀悼の気持から作られた歌は、日本挽歌（七五四～七九九）古日の歌（九〇四～九〇六）、そして志賀の白水郎歌（三八六〇～三八六九）が熊凝歌以外に指摘できる。日本挽歌は、大伴旅人の妻の死を悼むもので、七九九番の左注に「筑前国守山上憶良上る」とある如く、公的な献上挽歌である。伝統的な儀礼挽歌を十分意識した内容が日本挽歌に認められるのに対して、残る三種は庶民の死をテーマにしている。

巻十六に志賀の白水郎の歌が十首載せられている。十首全部が憶良の作品と考えるべきか、その一部を憶良のそれと認めるべきか、結論が出ていないにせよ、白水郎の死を悼む挽歌である。志賀の白水郎の歌が作られた事情は、三八六九番の左注に詳しい。事件は神亀年間に起きたとして、対馬輸送船の船頭を友人に代つてつとめた荒雄が松浦県的美祢良久から一路対馬をめざして船を出すやいなや、暴風のため海中に沈没したものである。そこで海中に没した荒雄を慕い妻子が歌を作ったと記しながら、なお別の伝承によれば筑前国守の憶良が代作した「述志」の歌である、とも注している。

事件そのものは、特別なものでもないし、むしろ遭難という一般的なことでありながら、憶良の詩心を強く刺戟するものがあつたのであろう。それが筑前の国守として、筑前淳屋郡志賀村の白水郎荒雄の妻子が悲傷する代作をさせたのであろう。憶良に代作させたのは、恐らく官命であつた船頭の任でありながら、老いたという理由で荒雄が友情から任を引き受けた点と、その善意に基づきながら海難死してしまふ点が特殊なことに原因するのであるまいか。

大君の遺さなくに情進に行きし荒雄ら沖に袖振る（三八六〇）

こと指しても遣らめ情出に行きし荒雄ら波に袖振る（三八六四）

第一首（三八六〇）と第五首（三八六四）とは、類似する歌でもあるが、荒雄の船出を「情進に行きし」とする。荒雄の行爲を依頼者津麻呂に対する男の友情と解し、それが死をも賭けるものであつた。海で働く人にとって、荒雄の遭難死は語り継ぐべき友情の典型である。庶民の死に積極的に歌で参加したのは、海人族が語り継ごうとした死を賭した友愛に憶良も共鳴したからである、と理解する。

事件が特殊なものでもないのに、積極的に創作を試みた幼子の死を主題とした作品がある。「男子名は古日に恋ふ

る」と題する長短三首の歌がそれである。古日という子供の死が憶良の実子であるか否か、この事実としての体験が昔なのか、或は代作歌として理解すべきなのか、種々なる疑問が提示されながら、議論は尽きることがない。しかし、古日の誕生を「我が中の 生まれ出でたる 白玉の 吾が子古日は」といったとき、夫婦が待望した、そして白玉の如くかわいい子供古日とは代作の立場で表現しても、そこには自分の幼子と重なる表現なのではあるまいか。さらに「明星の 明くる朝は 敷楮の 床の辺さらず 立てれども 居れども 共に戯れ 夕星の 夕になれば いざ寝よ」と手を携はり『父母も うへはなさがり 三枝の中にを寝む』と愛しく 其が語らへば」とあつて、三人家族の日常に見られる情愛を直接話法を用いながら明るく描いている。ここに描かれた幸福な家庭とは、庶民の願いであろう。しかも、天に光輝する金星、すなわちあかぼしとは特別美しく西空に出現する。子供の「いざ寝よ」「父母も うへはなさがり 三枝の 中にを寝む」という言葉は、かわいい子供の姿を彷彿させて余りある。かく愛すべき子供であればある程、親の願いとしては一日も早く、そして立派に成人してほしい気持ちになる。ところが、この成人してほしいと願った祈りも、天地の神には通じないで、

「漸漸に 容貌くづはり 朝な朝な 言ふこと止み」する状態になり、「命絶えぬれ」の状態になる。それにしても古日の長歌が表現するこの日常から死に到るまでの写実性とは、万葉集中出色のものである。かく理解するとき、年端もいかない子供が七十歳を越えた憶良にいると考えられず、幼児を失った人の代作をしたとするにせよ、この死に到るまでの描写は彼の人生にあつた一齣に重なるのであるまいか。

古日の歌は筑前から京に帰った天平五年の作であろう。やはり土佐から帰任した紀貫之は、日記中にしばしば土佐で失った女兒に触れている。しかも日記の最後の歌にも、みしひとのまつのちとせにみましかばとほくかなしきわかれせましや

とあつて、土佐日記創作の主題にも女兒の死が考えられている。

いずれにしても、ある特定の時期だけで歌作を考えてしまふのでなく、幼児の死などは年を経てなお創作動機になり得るものであることも配慮すべきであろう。すなわち、古日が友人の子供であつて、天平五年の出来事であつても、そこに描かれた写実的な内容は、彼の実人生の幼子喪失という経験に基づくものまでも否定しない。或いは、憶良の

生身であると思わせてしまふ、そんな写実の内容を見せることが古日の歌の特質ということになる。

憶良は、十一首の長歌を残している。そのうち挽歌は三首であり、旅人の妻を悼む日本挽歌、熊凝哀悼歌、そして古日の歌ということになる。神龜五年七月二十一日から天平五年という最晩年までの歌が残されているのであるから、挽歌は憶良の中心テーマであつたことになる。しかも、白水郎歌も古日の歌も名もない庶民の死に基づくものであり、それは熊凝の歌も同様である。志賀の白水郎歌では、荒雄の死から海に働く男の友情を、古日の歌では、幼児の死から子供と親との愛の絆をうたう。

挽歌とは、儀礼挽歌であれ、哀傷挽歌であれ、死者に対する鎮魂が本質である。ところが、憶良は志賀の荒雄や古日の鎮魂を試みているにせよ、語り継ぐべきものとして命を賭した友情と親子の愛の絆をうたう。それが憶良的であるし、特質と呼称すべき内容になっている。さて、庶民である熊凝青年の挽歌は、如何なる特質があるのであろうか。

二、序 文

熊凝歌の序文は、略伝の形式によりながら、死の状況を詳しく記し、そして挽歌六首を作り死去したとして一篇を

結んでいる。序文の眼目は、「一の身の死に向ふ途を患へず、唯し二の親の生に在す苦しみを悲しむ」という箇所にある。

序文は、仏教思想に基づく人生の把握として「仮合の身は滅び易く、泡沫の命は駐め難し」等と述べているが、人間の命の短い例えであり、悼亡詩の序に既に見られる内容で、「沈痾自哀文」以降の文章にも散見する。しかし、熊凝青年が「凡愚の微しき」存在としながら、その死がもたらす悲しみを、帰宅を待つ両親に子供を失つたために失明した子夏のご故事を利用して注目される。子夏のご故事は憶良の作品中ここだけで用いるのであるが、青年の帰りを待ち侘びる両親の悲しみの深さがあるため、「哀しきかも我が父、痛ましきかも我が母」という言葉が子供の苦悩を鮮明にさせている。しかも悩みの根本とは、自分が死んだ後の両親が苦しむ点にあつたのである。「子らを思へる歌」(八〇二、八〇三)で子を愛する煩悩を主題とした憶良は、三年後子と親の愛の絆をうたうことになる。子供の死により愛の絆を確認したことは、憶良の新しい創作意欲になるのであるまいか。

さて、序は三段に分けられる。第一段は、略伝の形式に基づく熊凝伝である。主人公の熊凝が天平三年六月に安芸

国で病死したことを述べる。第二段では、熊凝の科白に基づきながら、人間の命がとどまり難く、そして自己の死を自覚したとき、両親の哀しく痛ましい苦しみを思い遣る子供の心が語られる。第三段は、歌六首を作ったのが熊凝だとして、死に触れて結びとしている。全体は、歌が詠まれた状況の説明となっている。この中で特別なこととして、第二段のほぼ全部が熊凝の科白で占められていることがあつた。古日の歌では、子供の言葉を積極的に用いて写実的な効果を高めていた。子供に語らせる告白は、父母がこの世に残されて味わう苦悩に思いを巡らせる姿を強調することになる。序文中では、異彩を放つ方法であるが、自己を「凡愚」と規定していることで、そこに代作者である憶良が直接に参加してしまつた。すなわち、村山出氏が「凡愚」と表現することは、熊凝の立場の表現にとどまらず、憶良における人間への自覚」とされているが、子供の純真な気持であるべき「一の身の死に向ふ途を患へず、唯二の親の生に在す苦しみを悲しむ」が両親の思想を含むが如きになつてしまつた。死苦よりも生苦がずっと悲しいというのは、わざわざ「凡愚の微しき者」たる人間に言わせずに、何も修飾のない子供に語らせてこそ精彩を放つものである。そもそも死ななければならぬ苦悩よりも生きてい

る者がより苦しむというのは、十八歳の青年が持つ心情なのであるうか。

序文には熊凝十八歳と記している。十八歳という年齢は、如何なる意味を持っていたのであろうか。村瀬憲夫氏は、庸は徴収されないにせよ、課口であり、一応の大人でありながら、歳役などする必要がない年齢とする⁽³⁾。また、芳賀紀雄氏は、大伴の君という家柄などを配慮して、国庁の仕事に何らかのかかわりを持ち、中男（十七歳〜二〇歳）として家の農作業に従事していた、という可能性を指摘している⁽⁴⁾。熊凝が相撲の使の従人となつた経過について、徴発されたのか、任命されたのかという議論はさておき、現在いうところの少年ではない、むしろ立派な青年というべき年齢が十八歳ということになる。

ところで、憶良が子供を歌で表現するとき、村山出氏はいずれも親の保護を必要とする年少のものを登場させていることを指摘している⁽⁵⁾。歌と漢文との表現に相違が見られても当然なのであろうが、序文の熊凝は、十八歳の青年に相應しい。それに対して和歌の表現には、「たちちしや母が手離れ」（八八六）「常知らぬ道の長手をくれくれと」（八八八）などの如く少年と呼ぶべき内容が目につく。憶良の和歌で試みる像からいえば青年というより少年である

熊凝であるが、そのどこに感動したのであるうか。

万葉集には行路死人歌と呼ばれる作品がある。その誕生は、律令制度が整備されるにつれ、都と地方との交通が頻繁になることに由来している。憶良も行路死人として熊凝を取り扱うのであるが、死んでいく子供が残された両親の苦悩をより深いものと自覚した点に強く心を動かされている。これは、不孝ということになる。父母によく仕えるのが孝行、すなわち親孝行なのであるから、熊凝は親不孝な子供ということになる。しかも、熊凝という十八歳の青年が旅中での死を自分の不幸としなくて、親不孝としたのである。

序文に描かれた熊凝像は、立派な青年であり、孝をよく弁えている。この像が十八歳にしては出来過ぎたものであるか否か、それは憶良が作りあげたという問題に発展するのであるが、とにかく熊凝が「孝」を弁えた立派な青年として描写したのである。ちなみに天平三年十二月二十一日の続日本紀の記事に「孝子順孫」者に触れているが、村瀬氏は父母に孝養を尽くす子の称揚が天平年間に始まったものではないが、「国家の基本的な姿勢」であったとする⁽⁶⁾。

神龜五年七月二十一日に「子らを思へる歌」を作り、「眼交に もとな懸りて 安眠し寝さぬ」(八〇二)と愛苦

をうたった。三年後の天平三年の秋、今次は子供が親に対する愛苦をうたう。憶良は、親と子供の愛の絆を熊凝歌で子供の立場から創作したのである。行路で死んでいくという子供が親の生きる苦しみと思い遣るとき、親子の愛の絆を新しく発見したのである。つまり代作が親子の絆としてあらたな歌の領域を開拓したのである。

三、行路死人歌

熊凝の哀悼長歌は、三段構成からなる。第一段が十二句、第二段が十四句、第三段が五句で構成する。まず第一段は、あこがれの朝廷に上るため母の手許を離れて遠い道程をやつて来たのに、「何時しかも 京師を見むと 思ひつつ 語らひ居れど」とあつて、途中で上京することが不可能になったことを暗示させている。第二段は、道の片隅に仮りの床を敷いて体を横たえながら、故郷であれば父母が手を取つて看病してくれるだろう、と嘆いている。家と旅との対照が描写されていて、行路死人歌の手法を用いながら、旅中の死がいかに悲惨なものであるかを語る。一人死んでいく孤独な心情を描写するためとはいえ、「国に在らば父とり見まし 家に在らば 母とり見まし」とは、親を慕う年少の子供の姿であつて、十八歳という青年のそれに似

付かわしくない。長歌の一段と二段にそれぞれ母が一回、また二段に父が一回用いられていることも、青年の意識を代作する憶良に七十二歳という年齢からくるずれがあるのかも知れない。すなわち、旅中に一人死んでいかなければならない悲惨な姿も、父や母にこたわりすぎてむしろ作り物になってしまった。

第三段は、「世間は かくのみならず」という憶良の慣用句で始まり、「犬じもの 道に臥してや 命過ぎなむ」と長歌を結ぶ。この「犬じもの」とは、憶良独自の表現であるが、人間社会に最も身近な動物とはいえ、犬を提示して旅中に於ける死者と比較している。旅での死がこの言葉でとりわけ現実性を持つのであるが、さらに何の役にも立たず死ぬ意の「犬死に」が含まれているかも知れない。芳賀紀雄氏は、「たんに路傍での死を具象的に表わすにとどまらず、その『犬』は、漢語で『犬彘^{テイ}』『犬羊』などというとき、つまらぬものの比喩をも含意するのではないか」という⁽⁷⁾。とにかく犬を提示して旅中の死を表現していることは、行路死人歌の伝統を踏まえながらも、そこに質の違いが見られるのであって、憶良の独自性ということになる。参考のために行路死人歌の死者の姿を長歌から引用すれば、左記の如くである。

① 波の音の 繁き浜辺を 敷櫓の 枕になして 荒床に
自伏す君が (二・二二〇)

② 恐きや 神の御坂に 和霊の 衣寒らに ぬばたまの
髪は乱れて (九・一八〇)

③ 高山を 障になして 沖つ藻を 枕になし 蛾羽の
衣だに着ずに 鯨魚取り 海の浜辺に うらもなく
宿れる人は (十三・三三三六)

④ 恐きや 神の渡の 重波の 寄する浜辺に 高山を
隔に置きて 沖つ藻を 枕に纏きて うらもなく 偃
せる君は (十三・三三三九)

万葉集中の行路に死んだ旅人をうたうのは、人麻呂の石中死人歌と香具山で屍を見て作った歌 (三・四二六)、田辺福麻呂の足柄坂で死人を見て作った歌、そして巻十三の行路死人歌である。その中で長歌は五首あるが、一首 (三三三五) は、「玉梓の 道行く人」とあるだけで、行路死を暗示させていても死者の描写がない。そこで残る四首を参考にするために引用した。

① は人麻呂の「讃岐の狭岑島に、石の中に死れる人を視て」と題する。② は田辺福麻呂の「足柄の坂を過ぎて死れる人を見て」と題する。③ は作者不明で、題も記されない。④ は「備後国の神島の浜にして、調使首の、屍を見て」と

題する。以上の死者に対する描写は、場所・状態を説明した箇所を引用するもので、人により若干の相違は生じるにせよ、それ程の問題にならないであろう。そこで長歌の全句数と死者の描写が試みられた句数を示せば、次の如くである。

①	39	↓	6
②	31	↓	6
③	27	↓	10
④	35	↓	10

熊凝の長歌は、二九句から成り、そのうち「玉梓の道の隈廻に 草手折り 柴取り敷きて 床じもの うち臥い伏して 思ひつつ 嘆き伏せらく」の八句と「犬じもの道に臥してや」の二句が死者の描写ということになる。そもそも一首（三三三五）の例外を除き、行路死人歌の長歌は死者の状態を丁寧に説明している。ところが、連続して説明することはあっても、一度話題を変えたら再び死者を描写することがないのに、憶良は八句の説明後「国に在らば 父とり見まし 家に在らば 母とり見まし 世間はかくのみならし」と行路死人歌の特徴である旅と家を対照させ、再び死者に目を向けたのである。世間の常識だと述べ、次に「犬じもの」と動物の姿を重させた死者の姿とは、

行路死人歌に新しい表現のジャンルを与えている。死者の描写を詳しく述べようとするだけではなく、人間の死に喩えであっても動物を提示する憶良は、行路死人歌に新しい道を開拓するものでありながら、その後に影響を与えることがなかった。

長歌の第三段は、憶良の個性が指摘出来る箇所である。ところが、熊凝のかくも悲しい死の詠嘆を表現しながら、序文にある両親の苦悩に思い遣る内容が見られない。両親に孝行出来ずに死んでいく無念、そして残された者の生きる苦しみ、それが愛の絆としての存在になっていた。残念ながら、新しい表現を試みながら、序文の主題は長歌に具体的な姿を見せてはいないということになる。そこで長歌に続く五首の短歌はどうであろうか。

まず長歌に連続していても、五首の短歌は反歌としてはじめから全てが載せられたものではない。中西進氏は「あらためて五首の短歌をもって、熊凝の『志』を述べた。だからこれは反歌ではない」という。⁽⁸⁾ちなみに憶良の長歌には反歌の指示がない貧窮問答歌の例もあり、また反歌数も数首に及ぶものもある。反歌数で熊凝歌に添えられた短歌数に近似しているのは、日本挽歌の五首、老身重病歌の六首ということになる。

日本挽歌一首（七九四）

老いたる身に病を重ね、年を経て辛苦み、及、児等を
思へる歌七首〔長一首短六首〕（八九七）

そもそも憶良の長歌の題詞は、一般的な万葉長歌と同様の形式を踏まえるものであって、題目に続く歌数の指示も「一首并せて短歌」とあるものが多い。ところが反歌が五首と六首を数える長歌の題詞は、それぞれ三種三様である。題詞がどこまでもともの資料を反映しているのか疑問があるにせよ、日本挽歌が長歌の数のみ、老人重病歌が長短歌の合計と長歌と短歌のそれぞれの数、熊凝歌が長短歌の合計を記している。その他憶良の長歌は八首あるが、いずれも反歌数が一、二首であり、五首以上のものに題詞の歌数形式に乱れがあることになる。

日本挽歌の反歌五首について、前半の三首（八八七―八八九）と後半の二首（八九〇、八九一）とに分けて考えられる内容がある。すなわち、埋葬の時にうたわれた前半の三首、そして棟の花が形見となって大野山に霧の立ち渡る秋の二首ということである。

①家に行きて如何にか吾がせむ枕づく妻屋さぶしく思ほゆべしも（七九五）

②愛しきよしかくのみからに慕ひ来し妹が情の術もすべ

なさ（七九六）

③悔しかもかく知らませばあをによし国内ことごと見せましものを（七九七）

④妹が見し棟の花は散りぬべしわが泣く涙いまだ干なくに（七九八）

⑤大野山霧立ち渡るわが嘆く息嘯の風に霧立ちわたる（七九九）

右に引用した日本挽歌の反歌五首中、後半の④と⑤の二首は作歌の時期にずれを見せるが、そこにも反歌としての意識が見られる。「家ならば 形ならむを」と「心そむきて 家離りいます」という長歌を受けて、七九八番が「形」を、七九九番が「家離り」をそれぞれ叙情を深めていて、反歌の内容になっている。この二首は、埋葬から月日がたち、神龜五年七月二十一日までに作られ、長短歌六首で一組の挽歌として大伴旅人に献上された。さて、反歌六首の老身重病歌は、如何なることになるのであろうか。まず六首を引用する。

①慰むる心はなしに雲隠り鳴き往く鳥の音のみし泣かゆ（八九八）

②術もなく苦しくあれば出で走り去なと思へど児らに障りぬ（八九九）

③ 富人の家の児どもの着る身無み腐し棄つらむ純綿らはも（九〇〇）

④ 荒栲の布衣をだに着せかてに斯くや嘆かむ為むすべを無み（九〇一）

⑤ 水沫なす微しき命も栲縄の千尋にもがと願ひ暮しつ（九〇二）

⑥ 倭文手纏数にも在らぬ身には在れど千年にもがと思はゆるかも（九〇三）

これら六首は、三つのグループに分けて考えるべきである。⑥の歌は、神龜三年に作るもので、類を以ちてここに載せたという左注から天平五年六月三日に作った他の歌と区別できる。そこで六首という万葉集中最多の反歌数なのであるが、①から⑤までを長歌の反歌として考えてみたい。まず①と②は、長歌の「かにかくに 思ひわづらひ 音のみし泣かゆ」と「五月蠅なす 搔く児どもを 打棄てては死には知らず」とをそれぞれ受ける内容の一首である。ところが、③の歌からは愛の対象として登場しているのが、題詞にも記す「児等を思へる」ことである。まさしく第三反歌から第五反歌までは、長歌の主題に添うというより、題詞の「及」とある別の主題がはじめてうたわれる。第一、二反歌の児とは、障害なのである。「児らに障りぬ」（八九

九）状態に対して、親の子に対する愛を語るのが③と④であり、そして終わりの意味を持たせて⑤が作られている。では熊凝歌はどうであろうか。

熊凝の歌は、長歌と短歌とを区別することなく、歌の合計のみ記している。また、憶良の長歌十首中で貧窮問答歌とこの長歌だけが短歌とも反歌とも何も記すことなく、連続して短歌が添加されている。大伴家持と同池主とで試みられた万葉五賦は、その全てが長歌の後に何も記されず直ちに短歌が添えられている。わざわざ長歌の後に反歌などであろうと無かろうと同様に処理すべき点もあるが、熊凝歌については一考を必要としそうである。それは、五首の短歌が二つのグループに分けられることにある。

第一番から第三番までが前半のグループ、そして第四と第五が後半のグループになる。第一、三番歌は、長歌の「国に在らば 父とり看まし 家に在らば 母とり看まし」を受けて「たちちしの母が目見ずて」（八八七）、「家に在りて母がとり見ば」（八八九）とうたうのである。また、第二番歌は、「国遠き道の長手を」とうたう麻田陽春歌（八八四）を受けて、「常知らぬ道の長手を」（八八八）という表現になっている。さらにこの前半の三首は、長歌の抒情の主題になっている両親に会いたくてもままならなく

路の傍で死んでいく苛酷な悲劇にあるのであり、しかも憶良が「敬和」とした、

大伴君熊凝の歌二首 大典麻田陽春の作

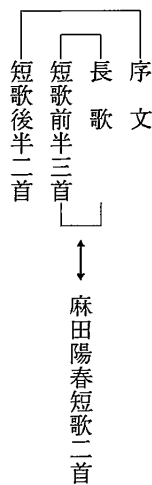
国遠き道の長手をおほほしく今日や過ぎなむ言問もな
く（八八四）

朝霧の消易きあが身他国に過ぎかてぬかも親の目を欲
り（八八五）

の主題に共通するものである。

ところが、序文のテーマは両親のこれからの苦悩を思い
遣る点にあった。「一の親の生に在す苦しみを悲しむ」と
いう序の主題は、後半の短歌二首に具象化されている。今
日か今日かと帰宅を待つ親の気持は、生き地獄の人生に進
展してしまうし、「一世には二遍び見えぬ」ことは、子と
親の愛の絆を確認したのであり、「眼交にもとな懸りて
安眠し寝さぬ」（八〇二）ことになる。第四番歌と第五番
歌とは、まさしく序文という主題を歌の世界で示したもの
である。

序文と長歌とは、主題にずれを見せていても、序文を
含む六首の組合せでみたとき、全篇が一つのまとまりを示
す。その意味では憶良歌中でも特殊な歌数を示す形式にも
当然すぎる配慮があったのかも知れない。



図で表わせば右の如き対応をみせていることになるが、
次に少しく陽春短歌二首に「敬和」したことについて考え
てみたい。

四、敬和

熊凝哀悼歌とは、陽春と憶良とによってうたわれている。
しかも、憶良が創作する一番の契機に陽春の二首が関わる
のである。すなわち、「敬和」とは陽春の短歌二首を指し
ている。ところが「敬和」しながら、序文・長歌・短歌五
首という大作にした憶良の意図、或は動機とはどのような
ものなのであろうか。天平三年という歌作の時期から、筑
前国守と大宰大典という仕事上のつきあい、故人的な親交
など諸々のことがあるにせよ、熊凝行路死という事件には
共通の認識も存在した筈である。まず、代作という点が一
致しているが、さらに村瀬氏は「憶良のこの作は追和歌で
ある」とした。⁽⁹⁾ 根拠に採り上げているのは、憶良の熊凝歌
の題詞と同じ形式を示す「敬みて布勢の水海に遊覧する賦

に和ふる一首」(十七・三九九三)と賦に添えられた短歌(三九九四)の左注に「四月二十六日追和す」とあることによる。

大伴池主は、家持の四月二十四日に作る「布勢の海水に遊覧せる賦」(三九九一―三九九二)に二日後追和しているが、池主の賦も家持の作品と内容が一致している。家持が「思ふどち　かくし遊ばむ　今日も見るごと」(三九九一)と長歌を終わらせ、短歌も「あり通ひいや毎年に見つづ偲はむ」(三九九二)とあるのに対して、池主も長歌を「かくしこそ　見も明らめめ　絶ゆる日あらめや」(三九九三)と結び、短歌も「世の間も続きて見に来む」(三九九四)とあつて、「見」の継承が見られる。さらに形式的なことからいえば、「賦」という言葉もそうであるが、長歌に添えた短歌も内容が反歌でありながら、何も記さず連続して本文を記載している。この形式と内容二点からも、憶良が「追和」という気持で創作しているのか疑問になる。さらに万葉集から「追和」の例を参考にしてみると、十五例(追同を含む)が採り上げられる。

①憶良　山上臣憶良の追ひて和へる歌一首(二・一四五)
五)

②家持か　後の人の追ひて同へる歌一首(四・五二〇)

③不明　後に追ひて梅の歌に和へたる四首(五・八四九)

④旅人　後の人の追ひて和へたる詩三首(八六一)

⑤不明　後の人の追ひて和へたる(八七二)

⑥不明　最後の人の追ひて和へたる(八七三)

⑦憶良か　最後の人の追ひて和へたる二首(八七四)

⑧三島王　三島王の、後に追ひて松浦佐用姫の歌に和へたる一首(八八三)

⑨家持　追ひて大宰の時の梅花に和へたる新しき歌六首(十七・三九〇一)

⑩池主　右は掾大伴宿祢池主の作(四月二十六日追ひて和ふ)(三九九四左注)

⑪家持　後に追ひて橘に和へたる歌二首(十八・四〇六三)

⑫家持　右の二首は、追ひて山上憶良臣の作れる歌に和へたり(十九・四一六五左注)

⑬家持　追ひて筑紫の大宰の時の春の苑の梅の歌に和へたる一首(四一七四)

⑭家持　追ひて処女の墓の歌に同へたる一首(四二一一)
一)

⑮家持　右の一首は、兵部少輔大伴宿祢家持、後の日に、

出雲守山背王の歌に追ひて和へて作れり（二〇・四四
七四）

以上が全ての追和を記した題詞と左注の用例であるが、作者もほぼ憶良と家持に限定される。例外的に旅人・三島王・池主がいる。題詞や左注のみならず歌を参考にしてもとりわけ「追和歌」の特質を見つけることが困難なのであつて、「和歌」に対して時間的ずれ、或は全く過去の歌、場所の相違などを意識したときに用いている。憶良が序文・長歌・短歌という晴の作品に相応しいものになっている原因は、「敬和」そのものより、事件の内容にあつたのではないであろうか。もとより「追和」を、或は「和」を積極的に試みたのが憶良であるが、かかる形式から陽春に刺戟されたにせよ、もつと本質的な理由が考えられてよい。

憶良は、陽春の歌二首を「志を述べたる歌」と解している。「述志」とは、六朝時代の詩題でもあり、懷風藻にも大津皇子詩に「七言。志を述ぶ。一首」がある。万葉集では二例のみで、もう一例も憶良が関わる志賀の白水郎妻子の傷を悲感しび、志を述べてこの歌を作れり」とあつて、妻子の悲しみに感じて思いを述べたとある。熊凝歌では陽春も憶良も代作の立場で共通していて、陽春の二首がそれぞれ親の「言問」が無いまま死ぬ悲傷と親に逢えずに他国

で死ぬ苦悩を語るものであるから、憶良のいう「其の志を述べたる」とは、子供が父母を残して去く死の別離にあつたことになる。陽春が二首の熊凝哀悼歌で示したのは、「朝霧の消易き」命であつても、旅中に一人死んでいく子供の両親に対する別離の情にあつた。憶良も「其の志」を麻田陽春に等しく把握していた。しかし、いくら陽春歌を解釈しても、両親を思い遣る子供の心情に死の苦悩より勝る生きていかなければならない苦悩までも配慮されていると思えない。

憶良は親子の愛の絆を熊凝という青年を通して、子供の立場からうたつた。そのことが新しい創作の意欲になつて、麻田陽春の短歌二首に「和」するものでありながら、序文を含む長短歌六首もの作品に結実したのである。青年の路傍死が視点を変えさせて代作する契機を生むのであるが、青年が見せた親への孝の姿は、まさしく語り継がれるべきものであつた。憶良にうたわれた熊凝青年は、公の場で晴がましく追悼され、また広く庶民にも紹介されたのである。熊凝歌のほとんどに「一は云はく」とあるが、中西氏のいう「この歌は民衆の生活と密接に結びついていた」⁽¹⁰⁾ことの証明であり、憶良の意図もそこにあつたのである。村瀬氏の、「国守として、民衆を教諭するため」という指

摘^{〔1〕}も当然のことであり、大宰府や筑前国庁の官吏にとつても、孝養の熊凝がよい宣伝材料になったであろう。

結 び

安芸国で相撲使の従人が京都に上る途中に病死した。憶良は、漢文序と挽歌六首で哀悼した。長歌に個性的な表現も見られるが、抒情の表白に満足出来ない一面があった。

しかし「子らを思へる歌」(八〇二、八〇三)から三年後、七十二歳の憶良は今までに経験しなかった青年の立場で「親を思へる歌」を創作した。

すなわち、挽歌でありながら行路死者の口から語り継ぎ、言い継ぎさせようとした主題は、孝養を尽くそうとする青年と両親との絆の深さであった。十八歳の青年は、死に臨みながら残される親の苦悩の重さに心を碎いている。この青年は、まさしく人々に知らしめなければならない孝養の人物であった。代作という手法で子供から「孝」を語らせたのは、国守たる憶良であったが、そこには庶民の感覚に近づこうとした、或は庶民的といえる憶良がいる。

ところで、人間の絆を否定するどころか、新しく確認した憶良が帰京後に「老いたる身に病を重ね、年を経て辛苦しみ、及、児等を思へる歌」(八九七、九〇二)の長短歌

六首、「男子の、名は古日に恋ひたたる歌三首」(九〇四、九〇六)を作ることは当然のことである。熊凝哀悼歌は、国守として最後に作られたというだけでなく、帰京後に庶民的な素材に創作する官人憶良の転換期のものとして理解されてよい。

注

- (1) 村山出氏は、この作品が「以後の憶良の主軸となる文学の主題が不十分ながら造型されている」と「熊凝歌」の位置(帯広大谷短期大学紀要10)で述べている。中西進氏は、熊凝、志賀の白水郎、古日の三作を筑前守時代に残すことで、「民衆への共感是完全に憶良の中で育成され醗酵されていた」として、貴重な作品と『山上憶良』(三六七頁)で評価している。

- (2) 注1村山氏論文に同じ。

- (3) 「山上憶良——熊凝歌について——」(和歌山大学教育学部紀要27)

- (4) 「憶良の熊凝哀悼歌」(万葉118)

- (5) 『山上憶良の研究』(一七六頁—一七九頁)

- (6) 注3に同じ。

- (7) 注4に同じ。

- (8) 『山上憶良』(二六五頁)

- (9) 注3に同じ。

(10) 注 8 に同じ。三六八頁。
(11) 注 3 に同じ。

(本学助教授)